比較文化会報

Dec. 1993 No.14

本部事務局 青森県弘前市稔町13－1
弘前学院大学英米文学佐藤研究室
電話 (0172) 34－5211内線216

発行者 芳賀 馨
編集者 楠 純一

「高崎よいとこ」

関東支部支部長 松井宣也

この女子短大がつくられてしばらく、事務部長をしておられたS先生が、このあいだ久しぶりに高崎に来られた。おめにかかると、「高崎はいいところですね、いいとこですね」と、くりかえしていわれる。「どこがそんなにいいですか」と問い直したものだ。すると「静かです。道が車でこんでいません」と答えられる。現在大阪でくらしておられるが、それにくらべていっておられるのだろう。

これは、高崎のよいところの三つめに加えた方がよいなとひそかに思ったものだ。この土地に十年も居つづけると、わからなくなってしまう。たしかにそう思ってみると、私の住いの近くの道など、車が少なくない方だが、信号をまっているのは、普通五、六台で、これをやりすごしてしまうと、もう車は来ない。私はバスで通勤しているが、お年寄など、車の方がとまってくれるさという感じで歩いている。

都会ではこうはいかないと、たまに上京するたびに思う。

よいところのひとつめは、何年か前に、これそれ一番目としたことだ。当時英語を教えておられて、今は京都にもどって行かれた若い先生がおられた。多分、この会のどこかで、宿の着物に着がえた先生の座られたももが大きくたかくて、こちらの薄くてひくいのに劣等感をおぼえながら、正面切ってここのよいところは、先生何ですか、ときいた。若い先生は、まよわずに、「水です」といわれた。先生は、水わりを連想しておられるのかなと思ったが、水がよいというのはつよく印象にのこって、忘れらない一つになった。

先生は京都から、私は東京から移ってまもなくだったので、とくに「水」のよさは私の中で一番になったのだろう。

私は私で、今年、今までにない体験をした。仙台の近くに住む知人が、お歳暮に水を送ってくれたのだ。それも五キロ包み二つだ。どうしようもなくて、家内もしばらく見ているばかりだった。少し暖かくなって、少さな庭の手入れに植木屋に来てもらった。ところが、この人が、玄関に入るなり、この水の包みをみとがめて、「あれ、これは奥さん、全国で一番うまい水だよ。ほっておくのかね、もったいない」。と家内はいわれて、早速、少しとりだして、冷蔵庫でひやしてのんでみたものだ。このとき程、私は下戸のかなしさを感じたことはない。名前は「湧水」北海道のものだ。

二つめも、少し前のことである。「関西に送ったら讃岐うどんよりおいしいといわれたわよ。」と教えてくれたのは、この方もう京都へもどられてしまった英語の先生だ。先生は大間々にある会社のものを送られたらしい。うどんについては知る人ぞ知るで、この土地のものはおいしい。これも、うであげたあとに洗うつめたい水がかなりきめてのひとつだということは同じ先生が教えてくれた。

このあいだ経済新聞の片すみに、自分でうどんをつくる五人程の社長の名があげてあったが、ある社長さんのすきなうどんに、讃岐、稲庭、水沢と三つあげてあるのに、喜びもし、考えてこんでしまった。その理由は、讃岐うどんのように、上州うどんとはいかないことだ。水沢は、榛名山の東面、水沢観音の近くの「水沢うどん集落」である。昔一軒しかなかった「うどんや」が今は二十軒近く、見事なお店をならべている。ここのうどんである。県内にはこの他にもおいしいうどんをつくって売る店が多いが、県の東の館村にも名の通った企業がある。群馬は粉食の国、これを二つめにおきたい。

あとのこりのスペースで是非あげておきたいのは、山が近いことだ。そんなに高い山はないが、山をながめるのは大好きで、極めて個人的なことになるので、一番最後にした。私は、この北の沼田で生れて山にかこまれてそだった。そして、山のみえにくい東京で三十年余りくらして、昭和五十七年の末に、ここに来た。

山のみえる所にくらすのは、私の幸せのひとつだ。ここに居をかまえ、十年近くたった今でも変らない。

朝、居室の北の窓をあけると、右手はるかに赤城山（一、八二八メートル）がみえる。すぐ眼の前に、たった一八一メートルの小坂山がある。低い山だがこの小坂山にときどき霧がかかる。木々の間を静にうごく霧をながめるのは、またとない喜びだ。おくに自慢になりましたが、第一六回大会に御参加の折には、是非高崎のよいところをみて下さい。

（新島学園女子短期大学教授）

第十五回大会を顧りみて

九州支部長　梅田　和郎

九州で最初の第十五回大会は、長崎ウエスレヤン短期大学鮫島記念ホール及び奥田学園にて五月二十九日に開催された。前日の二十八日十六時から観光ホテル道具屋において芳賀馨会長をはじめ各理事の出席のもと理事会、続いて懇親会が開催され次年度の大会地等が決定された。

長崎大会は「地域文化の衝撃—異文化との接触・交流そして融和—」がテーマであったので基調講演は純心短大の宮崎賢太郎教授「隠れキリシタン」であった。

地元の生月島に伝わる隠れキリシタンを中心にスライドを添えて解りやすい講演で、続くシンポジウムでは、各支部からのパネラーが、いずれも中国と日本との文化交流をテーマにコメントの発表があったため、従来にないシンポジウムとなったが、時間的制約があり討議にまでいたらなかったのは残念であった。しかし、各支部からの人選があったからこそで、皆様方の御協力に感謝したい。

分科会は奥田学園に会場を移しおこなわれたが、施設にも恵まれ5分科会ともきわめて熱の入った発表及び質疑であったと思う。言語と文化、民俗と文化などにまとめたのも意義があった。

大会終了後、有志による雲仙観光はあいにくの雨であったが、会員の懇親も深まり私ども大変有難たい思いがしました。

《第十五回大会総会報告》

一　報告

1　庶務報告

A　『比較文化研究』発行について

No.21号を発行。なお、主な送付先はハーバード大学のYENCHING LIBRARY、国会図書館など。

B　第十六回大会について

(1)　開催校　新島学園女子短期大学（群馬県高崎市）。大会日は一九九四年六月十一日(土)

(2)　シンポジウムのテーマ

「異文化教育—異なる価値観の受容に向けて—」に決定。

C　日本学術会議登録について

日本学術会議第十六期会員推薦のため学術研究団体登録を申請した。

2　会計報告

別紙資料

二　議題

1　役員改選について

全役員の留任を決定。新たに顧問に岡野久二（滋賀女子短大）、理事に中澤紀美子（園田学園女子大学）、井上博嗣（英知大学）、井上良彦（活水学院大学）を選出。

2　研究部会の新設について

各会員が自由に参加し、活動できる研究部会として、次の部会を新設することになった。

(1)国際文化研究部会　(2)言語文化研究部会　(3)放送文化研究部会　(4)生活文化研究部会　(5)日本語教育研究部会

これは各研究部会が主管して、例えば「日本比較文化学会シンポジウム」などを開催する。

3　表彰規程について

『比較文化研究』などを通じて、多数の優れた論文を発表してきた会員を表彰することに決定。

4　研究発表形式について

口頭発表の他に、写真展示など、展示発表も発表形式として認める。

5　編集委員の追加について

『比較文化研究』の追加編集委員として、次の通り承認された。

永盛　肇（琉球大学）、中澤紀美子（園田学園女子大学）、芳賀文子（元郡山女子大学）、片岡瑠美子（純心女子短大）

6　会員名簿に「会長室」を付け加えることについて

「会長室」（日本学術会議連絡先）を設けることに決定。

7　第十七回大会（一九九五年六月）開催校として南東北支部内から選ばれることになった。

8　中国四国支部設立準備委員会の発足

委員長　畠中康男（就実女子大学）

連絡先　〒七〇三　岡山市西川原一－六－一　就実女子大学文学部畠中康男研究室

電話〇八六二－七二－三一八五代

第十六回大会シンポジウムのテーマおよび講師の選出について

来年六月十一日に開催予定の第十六回大会におけるシンポジウムのテーマは「異文化教育—異なる価値観の受容に向けて—」に決定。

語学であれ、歴史であれ、異文化教育に携わる立場の者が、困ることがある。学ぶ者が安易に、異文化のなかの出来事を、自らの文化的価値体系のなかで、判断してしまうからである。多様化を容認し、共存せざるを得ない、地球社会に向けての教育のあり方を、多角的に検討してみたい、というのがテーマの主意である。

各支部は早期に講師各一名を選出して下さい。選出された各講師は「本部事務局だより」欄に記載した要領で、開催校までレジュメを送って下さい。

《近況のお知らせ》

一世代

西村清巳

四月に赴任した新設の青森公立大学は万事がアメリカ風、英語専門の大学でないのに、筆者以外の英語教師は全部アメリカ人である。開学早々サバティカル・リーブも始めた。筆者も九月に、七ヶ月の予定でアメリカとカナダに出掛ける。

今年は、米国政府の奨学金で大学院留学してから三十年目、一世代の時が流れた。豊かなアメリカの生活に初めて接した時の感激は今も鮮やかだが、渡米も繰り返せば変わりばえがしなくなる。

しかし今年は肩書に「弘前大学名誉教授」を加えて渡米する。一世代の変化はやはり小さくない。（JACC副会長）

石黒昭博先生の学位受領を祝う会

同志社大学文学部教授石黒昭博先生は、長年にわたり「英語における主語論」に取り組んでこられました。このたび、その研究成果の集大成として、The Notion of Subject in Modern Englishと題する学位論文を同志社大学大学院文学研究科に提出され、文学博士の学位を授与されました。これを記念して、日本比較文

化学会関西支部、石黒会、三一会主催による「お祝いの会」が十月十六日、からす ま京都ホテルで、先生と親交のある方々や教えを受けられた方々が大勢参加され、盛大に催された。

会員新刊紹介

石黒昭博編『世界の英語小事典』（研究社　一九九二年十二月）

現在世界で用いられている英語の変種―イギリス英語、アメリカ英語、黒人英語、カナダ英語、オーストラリアとニュージーランドの英語、南アジアとアフリカの英語、シンガポールとマレーシアの英語、フィリピン英語、ピジン・クリオール英語―をとりあげ、これを(1)成立過程、(2)構造上の特徴、(3)社会的・文化的背景、(4)展望に分け概説。学生やビジネスマンのためのコンパクト事典。

萬戸克憲著『国際化と英語科教育』（大修館　一九九二年六月）

国際化の現状と教育面での異文化間交流に対応する方策の動き（第一章）、アメリカの大学の日本進出の現状と英語集中課程での英語教育（第二章）、中・高に配置されている外国人講師の役割とauthenticityを中心としたよりよい活用（第三章）、自己表現を中心にこれからの英語科教育の方向（第四章）を述べる。異文化間コミュミケーションの立場から、英語教育を考えようとしたもの。

芳賀文子著『ちまき』（開文社　一九九二年十月）

遣唐使によって伝えられたというちまきの文化的背景から調理科学的特性と先人達の生活の知恵を探る日本食文化の書。食生活の急激な省力化、地域の過疎化、高齢化に伴い、日本の伝統食が次々に姿を消している。「ちまき」もその一つ。ちまきは日本の自然と日本人の心が作り出した伝統食であり、日本人の器用さを示す芸術品である。十数年来ちまきの魅力にとりつかれた著者が、日本各地に歩を進めて数々のちまきに出合い、その作り方までを記している。（全国学校図書館協議会選定図書）

石黒昭博・畠中康男・川本裕未著 A Shorter Course in English Quizzes（『5分間英語スーパー・クイズ』）（南雲堂　一九九一年十二月）

世界各国の政治・経済・社会・歴史・科学・文学・音楽・芸術・映画・スポーツに関する常識テスト。

芳賀馨・鈴木美恵子・引地岳雄編注『エミリィ・エミリ』（開文社　一九九三年二月）

発達に遅れを持つ少年を主人公にしたテレビ・ドラマ。テキストとして最適。

小牧英幸編著『幻の風物の中に見る前・スコットランドの歴史と文化とイソロジィ』（萌芽社　一九九二年七月）

十八年間に渡り収録した考古学的資料や写真をもとに、ダンカン王の即位によって誕生する「スコットランド」の成立までを、民族学的視点から扱ったもの。豊富な写真を見るだけでも楽しい。

《本部事務局だより》

1　入会希望者へ

本学会に入会を希望する方は、本部事務局へ「入会申込書」を提出して下さい。折り返し、必要書類をお届け致します。入会申込書は本部事務局または各支部に備えております。

2　第十六回大会案内

時　一九九四年六月十一日(土)
開催校　新島学園女子短期大学
問合先　〒三七〇　群馬県高崎市昭和町五三
新島学園女子短大　太田敬雄研究室　太田敬雄（電話　〇二七三－二六－一一五五。ファックス　〇二七三－二四－一四四四）

3　研究発表希望者へ

第十六回大会にて研究発表を希望する方は左記の要領で投稿願います。

(1)　レジュメをワープロなどで、B5版横書一枚にまとめて下さい。その際、左右の余白を二センチ程度残して下さい。

(2)　一九九四年三月三十一日必着で、上記太田敬雄研究室までお送り下さい。

4　シンポジウム講師へ

次回十六回大会のシンポジウムのテーマは総会で決定したように「異文化教育―異なる価値観の受容に向けて―」です。各支部は早い時期に講師を一名選出して下さい。選出された講師（各一名）は、(1)及び(2)とも研究発表希望者の場合の要領でレジュメをお願いします。

5　論文発表希望者へ

学会誌『比較文化研究』は現在年に三回（南東北、関東、関西各支部が担当）発行しております。論文掲載希望者は本部事務局または各支部編集責任者にお問い合わせ下さい。

6　学会誌『比較文化会報』に近況報告、支部活動報告、研究部会報告、新刊紹介等で投稿なさる方は、左記の要領でご応募下さい。

(1)　近況報告
　縦書　十八字×七行
(2)　新刊書、編注書等の紹介
　近況報告の場合と同じ
(3)　エッセイ投稿
　縦書　十八字×三十行
(4)　支部報告、研究部会報告
　縦書　十八字×六十行

投稿〆切日　毎年七月三十一日
投稿先　〒九六〇－一二　福島市光が丘一番地　福島県立医科大学数学講座　楠　純一

《支部からの報告》

新支部中国四国支部発足大会

就実女子大学教授畠中康男先生の御尽力により、中国四国支部が発足し、発足大会が十月二十三日、就実女子大学で開催され、同時に関西支部と合同研究会が行われた。

研究発表　小笠原真司、講演　石黒昭博、那須　頼雅

新設研究部会シンポジウム

九・十八　生活研究部会
テーマ　比較文化論の諸相
文化伝達における東西の比較　楠　純一
英国中世騎士物語「ガウェン卿と緑の騎士」にみる宮廷の食文化　柴田　良孝
白神山地のマタギの自然認識　斎藤　宗勝
司会　芳賀　馨

関西支部活動報告
（一九九一年）

四・二〇　Some Remarks on Conceptual Semantics　大岩　秀紀
Direct and Indirect Ways of Rejection : A Comparative Study of *The Crucible* and *Invisible Man*　橋本登代子
Some Remarks on English Narration　石黒　昭博
五・十一　Introduction to Dependency Phonology : On the Aspect of Infrasegmental Stracture　堀口　誠信
Transitivity in English and Japanese　木村　一紀
What is Kim? KiplingのインドとKim　麻生　規子
七・十三　A Syntactic and Pragmatic Analysis of Subject Ellipsis in English and Japanese : With Reference to Encoding of Animacy　山本　睦
*Moby-Dick*における語りの作為性　中島　正太
Fraudulent Selt in Melvill's Pierre : or the Ambiguities　小田　秀明
翻訳いろは匂へどPART Ⅳ : 翻訳難語考　釜池　進
九・二一　Some Remarks on Conditionals : A Cognitive Approach　玉村　友愛
The Conflict between Usualness in *Rubbit, Run*　柏原　和子
Thoreau's House and Huck's Raft　井上　博嗣
十・十九　*Pudd'n Head Wilson*におけるマーク・トウェンの「アメリカの夢」敗北宣言　森下　和彦
西洋歌舞伎『葉武列土倭錦絵』についてーその翻案にみる日本的思惟　平塚真美子
On the Narrative Point of View in Picaresque Novels　畠中　康男
十一・十六　A Pragmatic Approach to Modality：発話行為内の力と法性　田沢　順子
Bleak House : Lady Dedlockにみる人間性回復のテーマ　玉井　史絵
谷崎潤一郎における東と西　河野　仁昭
十二・十四　虚と実の間—Melvilleの"Benito Cereno"　堀　緑
言語の論理と慣用について—日本語を中心に　下内　充
モダニスト作家コンラッドの言語意識—伝記的背景との関連性　押本　年眞
一・十八　英語と日本語の省略についての一考察　草木　紀子
パノプティコンのような語りの空間—*Ulysses*第12挿話について　田村　章
インプット仮説と規則の習得　岡　良和
三・十四　アメリカ議会のメカニズムと対日圧力　竹本　明義
Patrick WhiteのVossに見るオーストラリア人—その理想と現実像　薗田　浩一
文学における生と孤独　斎藤　勇

（一九九二年）

四・二五　内的形式に関して　石原　堅司
スタインベックの曖昧さについて　吉川　礼三
五・十六　Helene Cixousの*I'Ecriture Feminine*の再考察—アングロサクソン・フェミニストによるフレンチ・フェミニズムの理解の問題点—谷本千雅子
Impersonalな中西部—Dreiserの*The 'Genius'*から—　広沢　寿子
「金メッキ時代」における不倫とその意味　那須　頼雅
七・十一　*The Prince and the Pauper*—現実の中の狂気と夢の中の真実—　筑後　勝彦
能楽の構成—「複式夢幻能」の魅力—　釜池　進
九・十九　A Study of Subjectification from Possessive *Have* to Perfect *Have*　玉村　友愛
Illocutionary Force Mitigating Devices　田沢　順子
哀愁のスコットランド　小宮山　博
十・十七　Constraints on Heary NP Shift　須川　精致
Some Remarks on the Narrative in *Typee*　藤田　淳一
CAI教室における英語指導の研究　畠中　康男
十一・十四　情報のなわ張り理論と共感理論の接点を求めて—心理文の分析より—　草木　紀子
"Noman"ブルームの勝利—「ユリシーズ」第12挿話における「名前」の問題について—　田村　章
Indian Women and Japanese Women　Stella Manuel
十二・十九　会話の構造—隣接対と応答—　西山　淳子
"My Reign or Captivity"—ロビンソン・クルーソーの孤独について—　五幣　久恵
文学作品と映画—William Ingeの場合—　辻　久也
一・十六　Physical Child Abuse : The Developmental Effeets and personality Characteristics　森脇　康子
愛の物語*Franny and Zooey*　岩尾　純枝
ThoreauとSteinbeck—人間観をめぐって—　井上　博嗣
三・十三　世界の少数民族・先住民族　加藤　靖弘
SteinbeckのOf *Mice and Men*における言語表現の特質について　河井　恵子
イギリス中世文学における子供　斎藤　勇